

2年生

知識・技能の分析と授業づくりのアイデア例

【知識・技能】

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・中2	70.7	95.4	83.8	65.7	37.7	57.7

平均正答率は70.7%で、A-D層の差は57.7ポイントでした。C-D層の差が28ポイントと大きくなっています。

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・中2	73.6	98.0	91.9	69.8	34.7	63.3

【大問1小問B2の正答率】

「どこで～しますか」を聞き取る問題でした。リスニング問題の中で最もA-D層の差が大きく、63.3ポイントとなりました。A、B層のほとんどの生徒が正しく答えられています。D層の生徒は何を尋ねられているのかが理解できていない可能性があります。

これから、英語の質問と、その質問に対する答えの文を3つずつ放送します。質問に対する答えとして最も適するものを1つずつ選び、解答用紙の番号に○をつけなさい。それでは、始めます。（1秒）

かっこに
(2)

F: Where do you play basketball? (1秒)

1

M: I play basketball every day. (1秒)

2

M: I play basketball in the gym. (1秒)

3

M: I play basketball with my friends. (1秒)

【授業づくりのアイデア例】

教科書の内容を生かした
「聞く」力を育成する指導の充実

①教科書を活用した生徒とのインタラクション

教科書本文のドラマを見る前に、それまでの物語の流れや、どんな場面かをイラストを表示しながら復習することが効果的です。

例えば“Who’s this boy?” “What are they talking about?” など教師が意図的に疑問詞を用いた英文を使いながら慣らしていきます。このような練習を繰り返し行うことで、質問の内容を理解することができるようになります。

②教科書のリスニング問題の活用

教科書に記載されているリスニング問題ではコミュニケーションの目的、場面、状況が明確に設定されています。そこで、既存のリスニング問題に加えて、教師が用意した質問に答えさせることにより、生徒に疑問詞に慣れさせるためのより多くの場面を作ることができます。

思考・判断・表現の分析と授業づくりのアイデア例

【思考・判断・表現】

平均正答率は55.8%で、A-D層の差が64.4ポイントでした。また、A-B層の差が24.8ポイントと大きくなっています。

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・中2	55.8	90.2	65.4	41.9	25.8	64.4

【大問4小問1の正答率】

英文を書く問題ですが、B-D層の正答率が30%を下回っており、特にD層の無解答率が75.0%で、解答した生徒でも正答者がいないということがわかります。一から英文をつくることに抵抗があったり、何を解答すればよいかわからなかったりする生徒が多いのではないかと考えられます。

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・中2	24.8	75.0	21.4	2.8	0.0	75.0

■ 次は、女性(woman)とユウジ(Yuji)の公園での会話です。自然な会話の流れになるように、(1)、(2)にそれぞれ3語以上の英語で書きなさい。(2)は **baseball** という語を使うこと。



Yuji Woman

Woman : I *found this ball there.

(1) ?

Yuji : It's mine.

Woman : *Be careful. Look at that *sign.

(2) in this park.

Yuji : I didn't know that. I'm sorry.

(注) found : find(～を見つける)の過去形

Be careful : 気をつけて。 sign : 看板

【授業づくりのアイデア例】

教師の英語使用の充実や「話す」と「書く」をつなげた英語の正確さの指導の充実

①Classroom English の充実

生徒がClassroom Englishの内容を理解できずに活動が止まってしまったとしても、日本語で言い直しをせず、簡単な英語で言い直したり、聞き取ってほしいところを強調して言うなどの工夫ができます。

また、例えば、教室内の落し物は“Whose ○○ is this?”と質問し、何度も生徒に触れさせることができます。この際に“Whose ○○?”でもコミュニケーションはとれますが、より丁寧で正確な英文を身に付けさせたいため、まずは教師が正確な英文で話し、何度も繰り返して使用することが大切です。

②SpeakingからWritingへ繋げる

教師と生徒、生徒同士で1つの話題についての双方向のやりとりが生まれた際に、対話の流れを書いてみることによって更に定着が図れます。

3年生

知識・技能の分析と授業づくりのアイデア例

【知識・技能】

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・中3	66.8	94.7	80.6	59.6	32.4	62.3

平均正答率は66.8%で、A-D層の差が62.3ポイントとなっています。また、C-D層の差が29.9ポイントと大きくなっています。

【大問2小問3の 正答率】

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・中3	47.4	93.4	64.5	28.4	3.4	90.0

書くことの領域で最もA層とD層の差があったのが英文に合う単語(answer)を書く問題です。A層が93.4%の正答率に対し、D層は3.4%と低い正答率となっており、昨年度同様、大きく差が開いています。

■ 次の(1)～(3)の英文が正しくなるように、文中の()に最も適する英単語を書きなさい。ただし、単語の始まりと終わりは与えられている文字とし、□には1文字ずつ入るものとします。

(1) Kate has a sister, but she doesn't have a (b □ □ □ □ r).

(2) The first month of the year is (J □ □ □ □ y).

(3) My (a □ □ □ □ r) to your question is "Yes."

【授業づくりのアイデア例】

言語活動中心の授業を支える 語彙の指導の充実

①新出語彙の導入について

語彙力は4技能の向上にも密接に関わっています。特に中学校では、新出語句の最初の指導において、英語を示してすぐに日本語の意味を提示することは避けて、なるべく文脈の中や学習者の身近な話題との関係で提示するなど、毎回の帯活動で繰り返し「意味・発音・スペル」の3つを結び付け、指導する工夫が求められます。

②新出語彙の活用方法

口頭でのやりとりの見取りを行う中で、発音などのエラーが見られた際に、フォニックス指導を行うなど日常的な指導が必要になります。

また、日々の帯活動で生徒が楽しんで取り組めるドリル活動を取り入れるなど、言語活動⇔ドリル活動のサイクルを意識した授業づくりが求められます。

思考・判断・表現の分析と授業づくりのアイデア例

【思考・判断・表現】

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・中3	60.1	94.3	75.2	47.6	23.1	71.2

平均正答率は60.1%で、A-D層の差が71.2ポイントとなっており、特にB-C層の差が27.6ポイントと大きくなっています。

【大問5小問B2の 正答率】

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・中3	58.7	95.5	83.4	48.6	7.2	88.3

大問5小問B2「夏祭りへ行く理由を述べる」ではA層は95.5%と高い正答率なのに対し、D層は7.2%と差が88.3ポイントとなっています。

【授業づくりのアイデア例】

スモールステップを踏んだ継続的な指導と
GIGA端末を活用した中間指導の充実

①スモールステップでの習得

書くことの領域の向上のためには中学校3年間を通して継続的かつ日常的に行う帯活動等において、初めから高い目標を設定せず、「インプットの強化」→「モデル文を真似る」→「アウトプットの練習(書く・話す)」と段階を踏んだスモールステップで少しずつ習得できるようにする必要があります。

②GIGA端末の活用

GIGA端末でミライシード内にある「オクリンク」や「FigJam」等を使いながら、相互参照をしたり、お互いのエラーを発見し、クラス全体で共有したりするなど、教師の一方的な教え込みだけではなく、生徒自らの主体的な学びに繋がる活動が求められます。

※ あなたは、夏に体験できる日本らしいことを調べているクラスメイトの留学生に、あなたの町で予定されているイベントを紹介します。絵に合うように、下の①、②の()に次の【条件】に従って適切な英文を書きなさい。

【条件】

①には、下の絵が表すイベントに行くべきだと伝える英文を、the summer festival を使って、主語と動詞を含む4語以上で書く。

②には、その理由を述べる英文を、fireworks(花火)を使って、主語と動詞を含む4語以上で書く。



主体的に取り組む態度の分析とアイデア例

【質問内容】 質問番号4

「日常的な話題について、事実や自分の考え、気持ちなどをまとめ、相手に伝わるよう英語で話すようにしている。」

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・中1	69.0	78.7	69.2	69.0	56.4	22.3
令和7年度・中2	66.1	81.3	72.4	61.9	48.6	32.7
令和6年度・中1	66.6	77.2	67.1	64.0	53.6	23.6
令和7年度・中3	67.5	82.8	74.2	64.6	48.3	34.5
令和6年度・中2	63.5	78.5	71.1	58.7	45.4	33.1
令和5年度・中1	65.3	78.8	68.1	61.2	52.8	26.0

【分析結果】

2年間または3年間の経年変化を分析した結果、1年次には、どの年度でもA層とD層の差が平均25ポイント程度なのに対し、2年次には差が32ポイントを超え、3年次の差は2年次とほぼ変化が無いことがわかります。このことから、1年次にはどの層でも比較的意識できていたことが、学年が上がるにつれ、意識の差が広がったと考えられます。この結果から、簡単な話題について相手に話す・伝える活動を3年間を通した継続的な学びとして行い、その習慣を身に付けることが必要だと考えます。

【授業づくりのアイデア例】

分析結果から意識改善へ繋げるためには3年間を通した帯活動の工夫と活用が有効です。会話活動に限らず、書くことも含め、自分の考えを表現する機会を日常的に設けることで、習慣化につながると考えます。

具体的な例として、会話活動や書いて表現する帯活動を行う際には、好きな事や相手に伝えたい最近の出来事など、シンプルかつ関心をもてる話題を設定し、意欲を引き出しながら活動する必要があります。また、活動の途中や活動後に、その日に活用した表現や、表現できなかったことを振り返り、適切にフィードバックを行うことで表現力の向上につながります。

さらに、学年や習熟度に合わせ、話題や表現方法の難易度を適切に設定し、3年間を見通した段階的な学習計画のもとで帯活動を行うことが、成功体験となり、自己表現への自信に繋がります。

帯活動とフィードバックを3年間継続的に行うことで、自分の考えを相手に伝えることが習慣化され、お互いに理解できる表現を使用し、相手に伝わるように話すことや書くことも意識的にできるようになるでしょう。

意識調査の分析とアイデア例

【質問内容】 質問番号30

新しく習ったことは、何度も繰り返して練習している。

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・中1	52.4	64.0	55.5	48.9	41.3	22.7
令和7年度・中2	48.8	63.2	55.1	42.5	35.0	28.2
令和6年度・中1	54.1	65.4	57.9	49.4	43.6	21.8
令和7年度・中3	56.1	70.5	62.0	51.6	41.3	29.2
令和6年度・中2	50.1	62.1	55.9	45.7	37.1	25.0
令和5年度・中1	57.7	66.4	60.4	56.2	47.8	18.6

【分析結果】

どの年度においてもA層とD層の差が大きく、各層においての意識の差につながっています。また経年で結果を見ると、学年が上がるにつれて、A層とD層の意識の差が開いている状態です。このことから、学習した内容を復習したり、授業や家庭学習の中で、書いたり、話したりしながら繰り返し既習事項に触れようとする意識や機会に差が生まれていると考えます。そのため、学習したことを振り返りながら授業を進められるよう、意図的に復習や繰り返し学習の機会を作ることが重要だと考えます。

【授業づくりのアイデア例】

授業づくりにおけるポイントとして、各UnitのGoal活動の活用があげられます。

教科書の各Unitに設定されているGoal活動では、それぞれのUnitで学習した内容を包括的に活用し、活動できるよう設定されています。そのため、Goal活動を行うことで、学習した内容を繰り返し学習する機会が必然的に設定されます。

Goal活動を通して、話したり、書いたりする活動に取り組ませる際には、活動に取り組む前に、Unitで学習した表現を再度全体で振り返る必要があります。また、活動の経過途中には、生徒が使用している表現について生徒へのフィードバックを行えるよう工夫することや、活動後には、生徒自身で自分の表現を振り返る機会を設けることで、単なる繰り返しにならず、表現力を強化しながら活動を行うことができます。

また、意図的に繰り返し学習を行う機会を作るためには、Goalまでを見通した単元計画も大切です。学習した単語や表現を使って話したり、書いたりする機会を毎時間の授業の中に組み込み繰り返し触れることで、知識の定着にもつながる考えます。

第2章 II

4 中学校全般を通しての状況と授業改善のポイント

中学校全般を通しての状況と授業改善のポイント

【状況】

- 知識・技能を習得する際に、その意味や方法について、他の学習内容との関連や、それとの違いなどについて思考することを通して、学習を進めることが必要です。
- 問題文などから与えられた条件、状況に対し、既習と比較してどのようなつながりがあるのかを考えたり、条件や状況に合わせて自分が考えたことやその思考の流れを伝えたりして、知識・技能を活用して説明するなどの活動を行えるよう支援していくことが必要です。

【授業改善のポイント】

- 概念的な理解に向けて、言語や数量、図形、事象などの見方・考え方を働かせた協働的な学び取り入れた授業の充実を図ることが大切です。
- 単元や題材などの時間のまとまりをデザインする際は、身に付けさせたい資質・能力を明確にすることが重要です。その際、各教科の見方・考え方を働かせた深い学びが実現できるよう、言語活動の充実などを行うことが大切です。
- 知識・技能の定着を促すには、理解することだけに留めず、学習したことを日常生活や他の学習で活用することを通して、わかる楽しさを実感できるようにすることが大切です。また、生徒が主体的に知識・技能を獲得していく学習場面を設定することが大切です。
- 習得した知識・技能を活用して課題解決を図る場を設定することが大切です。その際、「何故そうなるのだろう」「どのようにしたらよいのだろう」という問いを大切にすることが重要です。
- 生徒が考えを伝え合い、課題解決に向かう場面の設定が必要です。また、自己の学びを振り返り、学習内容のつながりを考えたり、さらに発展させて考えたりすることを、単元や題材など内容や時間のまとまりの中で計画的に位置づけて行うことが大切です。

第2章 II 5 他教科等の分析と手立て

中学校 音楽

【教科の理解度】

＜肯定的な回答割合と4層分析データから＞

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・中1	75.4	79.0	79.6	74.8	68.3	10.7
令和7年度・中2	71.5	74.3	73.0	72.7	66.6	7.7
令和6年度・中1	75.0	79.8	76.5	75.1	68.7	11.1
令和7年度・中3	70.1	73.2	71.0	70.8	65.4	7.8
令和6年度・中2	73.0	75.5	74.0	75.4	67.7	7.8
令和5年度・中1	74.2	78.6	75.5	74.9	67.9	10.7

【教科の好感度】

＜肯定的な回答割合と4層分析データから＞

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・中1	70.5	75.1	73.5	69.3	64.0	11.1
令和7年度・中2	65.6	66.6	65.5	66.6	63.9	2.7
令和6年度・中1	68.8	74.2	69.5	67.5	64.3	9.9
令和7年度・中3	67.7	67.6	67.8	69.2	66.2	1.4
令和6年度・中2	66.2	66.2	66.0	68.5	64.3	1.9
令和5年度・中1	68.7	73.7	68.9	68.8	63.4	10.3

【分析結果】

理解度では、肯定的な回答は、全学年で7割を超えています。どの学年もA層からC層に大きな差は見られませんが、C層とD層の間に差が拡大していることがわかります。同一母集団の経年変化に着目すると、中1から中2及び中2から中3ではすべての層で理解度が減少していることから、音楽科の学習に苦手意識をもっている生徒への一層の手立てが必要と考えられます。

好感度では、A層-D層の差が大きく開いていないことがわかります。学習の得意不得意に関わらず、全ての生徒が音楽活動の楽しさを体験することを通して学びを進める教科の特徴が表れています。

【授業づくりのアイデア例】

音楽科では、音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を育成することを目指しています。生徒が音楽科の学習を通して資質・能力を身に付けるためには、幅広い活動を通して音楽活動の楽しさを体験することが大切です。その際、音や言葉によるコミュニケーションを図り、音楽科の特質に応じた言語活動を適切に位置付けることは、表現及び鑑賞を深めていく際に重要であり、理解度の向上につながります。また、生徒が学習の中で思考・判断のよりどころとする「音楽を形づくっている要素」を精選することは、生徒が主体的に教材である音や音楽に向き合い、「わかった」と実感することへとつながります。

中学校 美術

【教科の理解度】

<肯定的な回答割合と4層分析データから>

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・中1	66.9	71.0	69.7	66.4	60.6	10.4
令和7年度・中2	74.1	75.6	76.0	74.7	70.3	5.3
令和6年度・中1	66.7	71.4	67.6	66.5	61.3	10.1
令和7年度・中3	71.5	74.2	71.4	72.6	68.6	5.6
令和6年度・中2	75.1	75.3	77.8	77.5	70.2	5.1
令和5年度・中1	67.5	70.5	70.0	67.4	62.2	8.3

【教科の好感度】

<肯定的な回答割合と4層分析データから>

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・中1	66.3	65.3	67.9	67.5	64.8	0.5
令和7年度・中2	67.8	66.5	67.7	69.4	69.7	-3.2
令和6年度・中1	65.8	65.4	66.2	65.9	65.6	-0.2
令和7年度・中3	66.6	65.0	66.0	69.7	65.5	-0.5
令和6年度・中2	68.4	66.0	70.3	69.9	67.5	-1.5
令和5年度・中1	64.7	64.9	66.5	64.8	62.5	2.4

【分析結果】

理解度は、全ての母集団で、中1から中2にかけてA-D層の差が小さくなる傾向があります。誰もが豊かに表現したり鑑賞したりできるように授業を工夫している結果だと考えられます。

好感度は、令和7年度の中2、中3ともに、中1から中2にかけて上がる傾向が見られます。また、どの学年もA-D層の差が小さいことが特徴だといえます。好感度の結果について見方を変えると、残りの約33%の生徒は、「好き」ではないと回答していることになります。このことを36人の学級に置き換えると、およそ12人は、「美術が好きではない」ということになります。

わかるけれども、好きではないという生徒がいることが予想されることから、「誰もがやってみたい」と感じる題材を設定したり、身に付けた資質・能力を生活や社会の中で生かすことができるようにしていくことが大切です。

【授業づくりのアイデア例】

美術科では、美術の創造活動の喜びを味わい、美術を愛好する心情を育み、感性を豊かにし、心豊かな生活を創造していく態度を養いながら、創造的に表したり、豊かに鑑賞したりすることができるようになります。

例えば、扱った経験のない材料や表現方法と出合わせて、「やってみたい。わたしにもできそう。」と感じられるようにすることが考えられます。また、表現方法を実際に試す場面を導入時に設けるなどして題材への抵抗感なくし、表現の見通しがもてるようにすることが考えられます。他にも、鑑賞やまとめをする時に、身に付けた資質・能力を生活や社会の中で生かせる場面について考えさせたり、日常生活で活用できている時に価値付けたりすることが考えられます。

中学校 保健体育

【教科の理解度】

＜肯定的な回答割合と4層分析データから＞

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・中1	80.9	81.3	83.5	81.6	77.6	3.7
令和7年度・中2	77.8	77.3	78.2	78.7	77.5	-0.2
令和6年度・中1	81.5	83.9	83.3	82.3	76.6	7.3
令和7年度・中3	77.3	75.1	77.5	79.9	77.5	-2.4
令和6年度・中2	76.7	75.1	77.4	79.1	75.6	-0.5
令和5年度・中1	79.5	81.2	81.3	80.3	75.0	6.2

【教科の好感度】

＜肯定的な回答割合と4層分析データから＞

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・中1	73.5	69.2	74.5	75.4	74.8	-5.6
令和7年度・中2	71.5	65.6	70.0	73.2	77.6	-12.0
令和6年度・中1	73.4	71.1	73.9	74.1	74.6	-3.5
令和7年度・中3	71.9	63.6	72.0	74.3	78.2	-14.6
令和6年度・中2	71.9	64.5	71.3	75.6	76.3	-11.8
令和5年度・中1	71.3	68.2	71.2	73.8	72.0	-3.8

【分析結果】

理解度の肯定的な回答割合は、全学年で8割近くなっており、また、A層-D層の差も小さいため、多くの生徒が「わかる」を実感できる授業が展開されていると推測されます。

好感度は、どの学年も7割程度ですが、A層の数値が7割を下回る結果となっています。「わかっているけれど、上手くできない」といった生徒への一層の配慮が必要です。また、前年度からの変化をみると、中3は数値にほとんど変化が見られませんでした。中2は少し数値が下がっていることがわかります。「なぜ好きなのか」「なぜ好きでないのか」といった理由を調査することにより、生徒の実態や授業改善のヒントが見えてくると考えます。

【授業づくりのアイデア例】

保健体育科では、生涯にわたって心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成することを目指しています。授業では、共生の視点を重視し、技能や体力の差を包含したルールや場、用具等の工夫を柔軟に行い、誰もが安心して学習に参加し、みんなが(みんなで)楽しめる授業を展開することが求められています。

単元をデザインする際は、生徒が各領域の特性に応じた楽しさや喜びを十分に味わうことをベースに、自他の課題を発見し、合理的に課題を解決し、また新たな目標を設定していけるようにすることが大切です。

中学校 技術・家庭(技術分野)

【教科の理解度】

＜肯定的な回答割合と4層分析データから＞

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・中1	57.9	66.0	57.7	55.8	52.3	13.7
令和7年度・中2	69.2	77.0	71.9	67.4	61.2	15.8
令和6年度・中1	57.6	65.9	58.3	55.7	50.7	15.2
令和7年度・中3	59.9	70.1	61.8	56.8	51.9	18.2
令和6年度・中2	68.4	74.1	72.7	67.1	60.1	14.0
令和5年度・中1	59.3	65.9	60.5	59.5	51.3	14.6

【教科の好感度】

＜肯定的な回答割合と4層分析データから＞

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・中1	66.7	73.8	66.9	64.4	61.8	12.0
令和7年度・中2	63.7	68.1	64.0	62.7	60.7	7.4
令和6年度・中1	66.3	74.3	67.7	63.5	59.7	14.6
令和7年度・中3	56.6	61.7	57.0	54.1	53.8	7.9
令和6年度・中2	63.6	64.6	65.7	63.1	61.5	3.1
令和5年度・中1	66.6	74.5	68.6	64.9	58.3	16.2

【分析結果】

理解度における肯定的な回答割合は、令和7年度も中2で、いずれの層も上昇する傾向が見られます。しかしながら、中3になると肯定的な回答割合が低くなるとともに、A-D層の差も前年度に比べると拡大する傾向が見られます。このことから、中2以降の授業でも「わかる」授業づくりに向けた改善が必要と考えます。

好感度における肯定的な回答割合については、学年が進むにつれて低くなる傾向が見られますが、令和7年度も中2で、A-D層の差が大きく縮小される傾向が示されています。また、中3においても、A-D層の差は7.9ポイントとなっており、中2段階と比べると差が開く傾向にはあるものの、中1段階で16.2ポイントあったA-D層の差は、大きく改善され続けていることが示されました。

【授業づくりのアイデア例】

技術分野では、技術の見方・考え方を働かせながら、ものづくりなどの技術に関する実践的・体験的な活動を行います。中1で取り組むことの多い「内容A 材料と加工の技術」の授業は、比較的身近な問題から課題を設定して実習を行うため、生徒にとって実感を伴って理解しやすい学習内容となっています。

課題である中2以降の授業においても、課題設定の場面では身近な話題から広げていくための工夫を行うことが大切となります。

また、3年間、技術分野の授業を楽しみにし続けながら学習活動に取り組ませていくためには、3年間を見通した指導計画を作成し、問題解決的な学習の難易度を段階的に高めていきながら、技術に関する知的好奇心を少しずつ育てていく工夫も大切となります。

中学校 技術・家庭(家庭分野)

【教科の理解度】

＜肯定的な回答割合と4層分析データから＞

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・中1	76.7	81.2	79.8	77.0	69.0	12.2
令和7年度・中2	71.4	77.8	73.6	70.5	64.1	13.7
令和6年度・中1	76.7	82.5	80.1	76.0	68.3	14.2
令和7年度・中3	71.7	78.5	73.0	71.8	64.9	13.6
令和6年度・中2	70.3	74.8	74.4	70.7	61.8	13.0
令和5年度・中1	75.3	80.2	77.9	75.3	67.8	12.4

【教科の好感度】

＜肯定的な回答割合と4層分析データから＞

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・中1	69.5	73.3	71.3	67.9	65.4	7.9
令和7年度・中2	65.3	67.2	66.6	63.9	63.7	3.5
令和6年度・中1	68.9	73.0	70.4	68.4	63.8	9.2
令和7年度・中3	64.9	65.3	64.5	65.7	64.4	0.9
令和6年度・中2	63.6	63.8	64.9	64.2	61.4	2.4
令和5年度・中1	67.2	70.4	67.7	67.0	63.6	6.8

【分析結果】

理解度は7割以上の生徒が肯定的な回答をしていますが、A層からD層にいくにつれ数値が下がっています。わからない子は理解できないまま学習が進み、それが中1から中3の経年変化にも結果として表れています。わからないことをそのままにしない手立てや授業内容の工夫を行っていくことが大切です。また、好感度の4層分析を見てみると、A層からD層に差異はほとんどありません。令和7年度中3の経年変化では、学力層による差異は縮まっていて、好感度が令和6年度より若干高くなっています。

【授業づくりのアイデア例】

家庭分野では、生活の営みに係る見方・考え方を働かせ、よりよい生活の実現や持続可能な社会の構築を目指しています。そのため、学習内容を生活や社会と関連付け、何のために学習するのか、どんな資質・能力を身に付けることができるかをあらかじめ示すことで、学習する必要感を高めることができます。また、実践的・体験的な活動を通して習得した知識及び技能が、生活の自立につながるように活動を組み立てることが重要となります。子ども同士で協働したり、意見を共有して互いの考えを深めたり、家族や身近な人々との会話を通して考えを明確にしたりすることにより、身に付けた力を家庭生活中で生かすことにつながると考えられます。

中学校 道徳

【学習意識調査から】【教科の好感度】 ＜肯定的な回答割合と4層分析データから＞

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・中1	69.3	67.8	70.3	70.1	69.1	-1.3
令和7年度・中2	70.2	66.9	69.2	72.5	72.1	-5.2
令和6年度・中1	69.5	67.2	70.5	71.3	68.8	-1.6
令和7年度・中3	67.4	61.8	66.7	69.1	72.2	-10.4
令和6年度・中2	69.2	64.8	70.2	71.5	70.5	-5.7
令和5年度・中1	67.9	66.8	68.1	70.3	66.3	0.5

【対話力】＜肯定的な回答割合と4層分析データから＞ 私は、話し合いの時、考えや意見を進んで出している。

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・中1	54.2	62.1	57.0	50.3	47.3	14.8
令和7年度・中2	49.3	60.1	51.8	43.9	41.6	18.5
令和7年度・中3	51.6	59.3	55.0	48.9	43.7	15.6

【分析結果】

好感度では、約70%以上が肯定的な回答をしており、A層に比べてC、D層の好感度が高く、同一母集団の経年変化では、令和7年度中3の回答では、D層で上昇しています。学習の得意不得意に関わらず、全ての生徒が同じ土台で話し合う教科の特徴が表れています。

「話し合いの時、考えや意見を進んで出している。」については、約50%が肯定的に回答していますが、どの学年もA-D層の差が大きくなっています。道徳科では、他者と話し合いながら、生徒が多様な感じ方や考え方に接し、人間としての生き方について考えを深めることが重要です。

【授業づくりのアイデア例】

道徳科では、生徒一人一人が答えが一つではない道徳的課題を自分自身の問題として捉え向き合う「考え、議論する道徳」への質的転換が求められています。

全ての生徒が同じ土台に立ち、活躍できる授業を作っていくために、挙手、ペア、グループ、書く活動、役割演技等を取り入れ、自分の考えを表出する工夫をすることが大切です。また、自分の考えをもったり、他者と共有したりできるよう、アンケート機能や心情曲線等、GIGA端末を活用して立ち位置を可視化することも工夫の一つです。自分事として考え、他者と話し合うことで考えを深めることが道徳科では大切な学習活動です。

中学校 特別活動

【学級活動の好感度】

＜肯定的な回答割合と4層分析データから＞

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・中1	80.1	84.8	83.4	80.6	72.1	12.7
令和7年度・中2	77.1	79.8	77.6	78.2	73.1	6.7
令和6年度・中1	79.4	84.6	82.7	79.2	71.2	13.4
令和7年度・中3	77.9	77.3	80.0	78.1	76.8	0.5
令和6年度・中2	78.2	79.8	81.9	79.3	72.3	7.5
令和5年度・中1	78.8	83.6	82.8	78.8	69.9	13.7

【分析結果】

好感度では、75%を超える生徒が肯定的な回答をしており、中1において80%を超えているものの、学年による大きな差はありませんでした。また、同一母集団の経年変化に着目すると令和7年度の中2、中3は微減傾向にあります。一方、A-D層に着目すると、学年が上がるにつれて差が縮まっています。このことから、上学年になるほど、学習の得意不得意に関係なく、学級活動を通して主体的に学級や学校における生活づくりへ参画できていると捉えることができます。

【学級力】＜肯定的な回答割合と4層分析データから＞

私は、自分たちの学習や生活をよりよくするための話し合いや活動に進んで取り組んでいる。

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・中1	74.2	77.8	76.6	74.0	68.8	9.0
令和7年度・中2	73.3	78.3	74.9	72.7	67.6	10.7
令和6年度・中1	74.0	79.3	76.5	72.0	68.5	10.8
令和7年度・中3	74.8	78.6	76.1	74.9	70.8	7.8
令和6年度・中2	73.6	77.0	76.2	73.6	68.3	8.7
令和5年度・中1	74.5	79.1	76.6	74.2	67.9	11.2

【分析結果】

令和7年度の結果を見ると、学年間の大きな違いはありませんでした。同一母集団の経年変化としては、中3は学年が上がるにつれてA-D層の差が減少傾向にあります。

【授業づくりのアイデア例】

「なすことによって学ぶ」が方法原理の特別活動において、「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」という特別活動で育成を目指す3つの視点を意識した指導の改善が求められます。特に学級活動(1)の話し合い活動において、より多くの生徒が司会グループを経験できるようにするなど、一連の学習過程に基づく実践の積み重ねが大切です。

中学校 総合的な学習の時間

【教科の好感度】

<肯定的な回答割合と4層分析データから>

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・中1	69.3	67.8	70.3	70.1	69.1	-1.3
令和7年度・中2	70.2	66.9	69.2	72.5	72.1	-5.2
令和6年度・中1	69.3	71.6	70.3	69.1	66.3	5.3
令和7年度・中3	67.4	61.8	66.7	69.1	72.2	-10.4
令和6年度・中2	70.9	67.9	72.6	73.6	70.3	-2.4
令和5年度・中1	70.2	73.5	71.9	71.0	64.5	9.0

【授業で習ったことを普段の生活と結び付けて考えている。】

<肯定的な回答割合と4層分析データから>

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・中1	61.4	69.8	62.5	60.2	53.6	16.2
令和7年度・中2	50.9	61.5	54.5	46.8	41.0	20.5
令和6年度・中1	62.5	70.6	65.3	59.8	54.5	16.1
令和7年度・中3	50.4	62.6	52.6	46.5	40.2	22.4
令和6年度・中2	51.1	60.8	54.5	48.8	40.9	19.9
令和5年度・中1	64.1	72.6	65.4	63.6	54.9	17.7

【分析結果】

どの学年においても肯定的な回答が7割程度となっております。経年変化を見ると、年度による増減はほとんどなく、ほぼ横ばいが続いているということがわかります。

特徴的な傾向は、右側A-D層の差については、令和7年度の全ての学年において、A層よりもD層の方が肯定的な回答が上回る結果となりました。中3については、D層の方が10ポイント以上高いことがわかります。

【授業づくりのアイデア例】

総合的な学習の時間は、探究的な見方・考え方を働かせ、総合的・横断的な学習を行うことを通して、資質・能力を育成します。授業をつくる際には、まず取り扱う学習材が身近で具体性のあるもの、探究的な学習に発展する可能性のあるものであるか、しっかりと吟味します。さらに、どのように生徒の探究が進むか、教師が単元の見通しをもつことで、どこでどんな体験活動を入れるか、外部講師はどうするかといった手立てが見えてきます。また、各教科等との関連を考えながら単元を構成することで、生徒は各教科等で培った力を探究的な学習の中で活用し、汎用的な力として身に付けていきます。例えば、調べたことを数値化・グラフ化する(数学)、資料を読み取る(社会)、目的や相手に応じて伝え方を考える(国語)といったように、単元の進捗における生徒の思考の流れに沿って、他教科等との関連を意識し、カリキュラム・マネジメントしていくことが大切です。

第2章 Ⅲ 学習意識調査の結果

Ⅲ 学習意識調査の結果

1 学習の理解度 ※数値は「よくわかっている」「まあわかっている」と肯定的回答をした割合(%)。

○【理解度】同一学年比較(昨年度との比較) ※差は、小6－小4、中3－中1の値。

《小学校》

R7	国語	社会	算数	理科	R6	国語	社会	算数	理科
小4	86.3	80.4	82.4	89.8	小4	85.3	82.1	84.0	90.0
小5	86.7	83.6	79.9	90.9	小5	87.4	83.7	79.3	90.8
小6	87.4	86.8	74.8	86.5	小6	87.0	86.6	74.1	87.8
差	+1.1	+6.4	－7.6	－3.3	差	+1.7	+4.5	－9.9	－2.3

《中学校》

R7	国語	社会	数学	理科	英語	R6	国語	社会	数学	理科	英語
中1	79.3	71.6	67.9	72.9	66.5	中1	80.9	70.5	68.4	71.6	67.0
中2	78.0	63.9	61.1	64.3	63.6	中2	77.5	63.9	61.4	64.4	62.8
中3	76.1	70.6	64.1	62.6	58.8	中3	77.2	67.9	62.5	60.4	61.4
差	－3.2	－1.0	－3.8	－10.3	－7.7	差	－3.7	－2.6	－5.9	－11.2	－5.6

昨年度と比べて、特に大きな変化は見られませんでした。

○【理解度】同一母集団の4層ごとの経年変化
 ≪小学校≫(4教科平均)

年度・学年	学年の平均値	A層	B層	C層	D層
R7・小4	84.7	94.5	90.3	83.7	70.7
R7・小5	85.3	96.0	90.7	84.6	69.9
R6・小4	85.4	94.7	89.7	84.4	72.5
R7・小6	83.9	96.2	90.3	81.8	67.6
R6・小5	85.3	96.2	90.7	84.0	70.5
R5・小4	85.6	94.7	90.1	84.7	72.6

≪中学校≫(5教科平均)

年度・学年	学年の平均値	A層	B層	C層	D層
R7・中1	71.6	89.5	78.2	68.2	50.2
R7・中2	66.2	90.1	76.4	58.5	40.1
R6・中1	71.7	89.9	77.9	67.8	50.5
R7・中3	66.4	89.8	76.6	60.5	39.9
R6・中2	66.0	90.1	75.5	59.3	39.7
R5・中1	71.1	90.1	78.6	65.8	50.2

各層を経年比較していくと、下回る傾向にあるのはC層、D層に多い状況です。特に中1から中2にかけて大きく下回っています。

一方、今年度中3は、A層を除いて中2だったときを上回り、学年が上がって学習内容が難しくなる中でも、わかる実感が増してきていると考えられます。

理解度を経年比較すると、中2から中3にかけて前年度を上回り、層ごとに見るとA層以外のB、C、D層が上回っている。

理解度を経年比較すると、C、D層で前年度を下回ることが多い。特に中1から中2での下回り幅が大きい。